



TITLE:

カントの道徳的意思形成の理論(Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

戸田, 潤也

CITATION:

戸田, 潤也. カントの道徳的意思形成の理論. 京都大学, 2017, 博士(人間・環境学)

ISSUE DATE:

2017-03-23

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k20452>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開

(続紙 1)

京都大学	博士 (人間・環境学)	氏名	戸田 潤也
論文題目	カントの道徳的意志形成の理論		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文の考察対象は、カントの後半生の目標である『人倫の形而上学』の執筆に必要不可欠な予備考察としての役目を果たした批判倫理学である。</p> <p>人間は道徳的であることによって神の創造の目的に適うとカントは考える。学究生活の当初から彼が有していた形而上学に対する関心が道徳の問題と関連づけられるとき、1.「人間が道徳的存在者である所以はどのようにして示されうるか」という問いは、人間に対する形而上学の可能性への問いともなる。この問いをめぐるカントの考察を分析する際、申請者は、道徳法則に関する「判断原理」と「実行原理」の区別を堅持する。というのは、或る道徳法則を判断原理と見做すことがそのまま直ちに、これを実行原理として引き受け、現実の道徳的実践に及ぶことまでも意味する訳ではないからである。こうした両原理の峻別からは、次の如き問いが更に生ずることになる。すなわち、2.「感性的存在者である人間にとって、道徳法則を実行原理として遵守することは、そもそも（また如何にして）可能か」、3.「現実には道徳的存在者たりうる為には、人間は具体的に何をせねばならぬか」。本論文はこれらの三つの問いの解明を通して、カント批判倫理学の主著、『人倫の形而上学の基礎づけ』（以下『基礎づけ』と略記）と『実践理性批判』（以下『第二批判』と略記）の根本問題を闡明せんとするものである。</p> <p>周知の如く、道徳性の最高原理である「自律の原理」と唯一の定言命法たる「普遍的法則の方式」の何れが優位かをめぐる『基礎づけ』の論述は、定言命法の方式は幾つあるかという問題とも相俟って晦渋である。その為、このカントの議論を再構成する試みは未だ後を絶たぬものの、その中で定説と目されるのは、H. J. ペイトンによる解釈である。本論文第一章では、「普遍的法則の方式」の提示から「自律の原理」の導出に至る『基礎づけ』の議論の精査を通して、ペイトン説が批判的検討に付される。その結果、彼の見解とは異なり、定言命法の方式は三つであると考えられるべきであること、そして「自律の原理」は純然たる理性的存在者の実践の有り様を定式化したものであるのに対し、「普遍的法則の方式」は専ら人間のみを対象とする命法である以上、両者は素より同列には論ぜられず、優劣を争うものではないという結論が得られる。</p> <p>次いで第二章では、前掲の第一の問を解明すべく、古来難解を以て鳴り、その成否については甲論乙駁未だ尽きせぬ『基礎づけ』第三章が検討される。ここでカントはまず、「自律の原理」を解明する為の鍵は自由の概念にある旨を説く。こうした所見を基に、彼の立論は純粹実践理性から人間の自由を演繹し、それによって定言命法の可能性を示すといった手順を採ることになる。故にその議論の成否は「人間に自由を帰することは、はたして、そして又如何にして可能か」という点に懸かっている。そこでカントは超越</p>			

論的觀念論という自らの理論哲学の立場に立脚して、人間が理性的存在者として自由な存在者であることを示さんとする。だがこの論法では「自然の因果連関からの独立・自由」として、人間の自由を消極的な仕方ですすことしかできない。この点に関してカントもまた自らの論証の限界を認めている。しかしながら申請者の見るところ、これは単に彼の企図の挫折を意味するものではない。『基礎づけ』出版後の書簡で『人倫の形而上学』の執筆をいよいよ開始する旨をカント自身が宣言していることに鑑みても、この「挫折」は批判哲学の趣旨に沿い、問題の解決を人間理性の限界内で図る試みとして、却って寧ろ肯定的に評価せられるべきなのである。

第三章では、冒頭の第二の問に取り組みつつ、『人倫の形而上学』の準備作が『基礎づけ』から『第二批判』へ変更されるに至った経緯と、両者の異同を明らかにする。『基礎づけ』に続いて著された『第二批判』の課題は、前作の議論の難点を突く批判に応えるべく、従来は単に理念として前提されたにすぎない自由の客観的実在性を示すことにある。その為『第二批判』では、道徳法則の実在性を「理性の事実」として提示し、次いでこの道徳法則に関する我々の意識から自由を演繹することが試みられる。こうした立論は無論、自由の理念から道徳法則を導く前作のそれとは正反対である。とはいえ、自然の因果連関に依存せぬ我々の意識の有り様を以て道徳法則が意志の直接的な規定根拠たりうることを示し、前掲の第二の問に答えんとする『第二批判』は、やはり前作同様、人間理性の限界内にどこまでも踏み止まる姿勢を堅持していると言えよう。

第四章では、個々人の主観的行動原理である格率の普遍的妥当性を求める「普遍的法則の方式」の分析を通して、劈頭の第三の問への解答が試みられる。カントの所謂「格率」は実のところ、個々人に特有であって普遍化が不可能なものと、道徳原理として普遍性を備えているものに大別される。そして前者をして後者へ漸近せしめるべく前進していく不断の歩みを措いて、我々が現実的道徳的存在者たりうる道は無い。この点を強調する限りにおいて、カント倫理学は格率倫理学とも称されうるのである。

結語では各章の議論が総括されると共に、カントの啓蒙概念の要諦もまた道徳にあることが指摘される。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は「カントの道徳的意志形成の理論」と題されている。しかしながらこうした一見限定的な題目を掲げることによって、申請者は道徳哲学というカント哲学の様々な側面の中の一つに自らの考察の範囲を限局して能事畢れりとするのではない。否寧ろ、本論文がカント倫理学を主題に据えるのは、申請者の見るところ、まさしくこの道徳の問題こそが、1760年代半ば以降のカントにとって中心的な問題であり続けた為に他ならない。本論文の特色は、その議論の射程が啻に道徳哲学のみならず、『純粹理性批判』や『判断力批判』等をも含めた批判期のカント哲学全般を覆わんとするものであり、当該哲学の全容を申請者独自の雄渾なる問題意識に鑑みて統一的に把握せんとするところにある。

以下ではまず、本論文に関して評価せられるべき点を三つ挙げ、それぞれについて逐次詳述していくことにしたい。

第一に本論文は論題に関連する先行研究を能う限り博搜渉猟し、その中でも研究史上重要な意義を有し、今や定説と称せられるべきものと批判的に対決する作業を通して、自らの解釈を説得的なものとして構築することに努めている。例えば第一章では『基礎づけ』における定言命法の方式の分類に関するH. J. ペイトンの解釈が、そしてまた第四章においては、カントの説く「普遍的法則の方式」に対するG. W. F. ヘーゲル、G. ジンメル、A. W. ウッドの三者による批判が俎上に載せられるが、その際申請者はカントの原典の丁寧な読解を基にして如上の諸家の難点を指摘した上で、こうした問題点に応えるものとして自説を呈示している。その試みは概ね成功していると言えよう。

第二に本論文は、汗牛充棟も真に啻ならざるものがあるカント哲学研究を以てしても未だに決着を見ず、甲論乙駁が尚も続く解釈上の難問から目を逸らすことなく、これに正面から敢然と対峙することを辞さない。当該問題をめぐってこれまで提出されてきた種々の議論が輻輳する論争史を十分に勘案した上で自ら熟思勘考することを経て、己が見解を旗幟鮮明にせんとする申請者のこうした姿勢は、前述した「定言命法の方式の個数」の問題（第一章）、『基礎づけ』第三章における「循環」論法の問題（第二章）、そして自由の理念から道徳法則の導出を試みる『基礎づけ』と、逆に道徳法則の実在性から自由を演繹せんとする『第二批判』との間に認められる「転回」の問題（第三章）への取り組みにおいて遺憾なく発揮されている。

第三に本論文は如上の周到綿密なるカント研究を以てして、最終的には、最早カント解釈の枠内のみには留まらぬような普遍的かつ重要な問いに答えることを試みている。すなわちそれは、神の如き純然たる理性的存在者ならぬ我々人間にとって、道徳的であることとは畢竟して何を意味するのかという問いである。これに対して申請者は、＜我々にとって可能である道徳的なあり方とは、「自己の完全性」と「他者の幸福」の実現という目標に些かなりとも近づいていくべく、不撓不屈の姿勢でどこまでも前進し続けることに他ならない＞と答える。そして個々の場面における行動の具体的な規範を示したりはしないことから、単なる「形式主義」であると屢々批判されるカント倫理学は、まさしくそれが形式的であり、パターンリズムの弊を免れているが故に、こうした無限前進の際に却って各人の自主性を促すことになるのではないかと申請者は指摘している。これは、一見互いに無関係であると思しきカント倫理学の形式主義とハイデガーの「形式的告示」の思想が一直截の影響関係の有無は扱措き一少なくとも問題となっている事柄に関しては密接に関連しあっていることを示唆するものであり、蓋し卓見であろう。

但し本論文では、本来解明せられるべくして未だ詳らかにされぬ儘に留まっている重要な問題が幾つか残存していることもまた事実である。例えば自由概念や道徳法則が（経験的には決して確証されえないものの）客観的实在性を有しているとカントが主張する際、その「实在性」とは果たしていかなるものであるのか。また道徳性が成立する場であるとカントが説く「叡智界」、及びこの叡智界と現象界の関係を我々はどうのように理解すべきであるのか。しかしながら上来述べ来たった本論文の功績は、こうした未解決問題が残されている廉を以てしても決して否定されぬ程、顕著なるものである。学位申請者の努力を多としたい。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成二十八年十二月九日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。なお、本論文は、京都大学学位規程第十四条第二項に該当するものと判断し、公表に際しては当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： 年 月 日以降